

読者のひろば

CO患者の命
見据える必要

高谷和生 59歳 公務員
(玉名市)

昨年来の本紙「COと50年」の特集記事などを読み、いまだ終わらないCO(一酸化炭素)中毒後遺症の現実には、2012年11月、事故後初の公開で訪れた三川坑の生々しい様子を思い出した。この1年余りで、地域を取り巻く事情も大きく変わった。三川坑跡ほかの大牟田・荒尾市への無償譲渡が決まり、事故から50年の昨年11月10日には行政が関わった追悼式典が初めて催された。さらには万田坑・宮原坑等の三井の遺産群が「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産登録への国内候補一本化にこぎつけた。しかし、大牟田労災病

院廃止に伴う後の医療の必要性を明記した確認書の未履行政など、被害者を置き去りにした構図は、ハンセン病問題や水俣・福島と同様、命を軽視した日本の縮図そのものである。CO患者救済にあ

った原田正純医師は、戦後最大の労働災害である本件の「大なる原因は、人(労働者)を人と思わぬ差別」と言っている。

囚人労働、連合軍捕虜労働、炭じん爆発と、荒尾・大牟田の炭坑の歴史は、まさに「負の歴史」

である。大牟田市はただ1回の式典を機に、三川坑跡の常時公開を進めるという。果たして、今も

中毒に苦しむ患者や家族が納得するだろうか。

CO患者の命を真ん中に据え、ハンセン病市民学会や水俣学で実践されているような広範な市民活動へと広げる必要があるのではなからうか。

「読者のひろば」への一般投稿、若者コーナーは450字程度、主張・提言は600字程度。◇欄外に郵便番号、住所(アパート・マンション名も)、氏名、年齢、職業(無職の方は元職でも可)、電話番号を明記する◇趣旨を変えず文章を直すこともあります◇原稿は返却しません。二重投稿、採否の理由等の問い合わせはお断りします。匿名は不採用。掲載分には薄謝を送ります。あて先は①郵送 〒860-8506、熊本市中央区世安町172、熊日「読者のひろば」係 ②ファクス 096(363)1268 ③Eメール hiroba@kumanichi.co.jp

投稿される方へ